佳作

最後のクッキー

岐阜県 多治見西高等学校三年　酒井 琶矢女

「いつか、はーちゃんがお箏を弾いている姿を見せてね。」

高校二年生の春休み。親戚のおばさんであるよしえちゃんとの会話はそれが最後だった。心残りがあるとすれば、よしえちゃんにお箏を弾く姿が見せられなかったことだ。もしかしたら、全国の舞台に立つ私を天国から応援してくれているかもしれない。

コロナ禍だったこともあり、何年も会えない間によしえちゃんは大きな病気を抱えてしまった。定期的に入院を繰り返していたが、最後は自分の家で過ごすと決めていたらしい。最後に会った日から一ヶ月も経たずに、よしえちゃんは静かに天国へと旅立ってしまった。棺の中で眠るよしえちゃんは、安らかな顔でとても綺麗だったことを鮮明に覚えている。

初めて身近な人が亡くなったのは小学一年生の頃。大好きな祖父が亡くなったことは、当時幼かった私には全く実感のないものだった。次の日も祖父が近くにいるのが当たり前だと思っていた。高校生になり、よしえちゃんが亡くなって、一つだけ分かったことがある。それは、身近な人が亡くなるのは突然だということだ。

春休み終盤。母の突飛な思いつきで、親戚の家へ遊びに行った。電話越しでは何度か声を聞いたが、対面で会うのは久しぶりだからと、普段は全く料理をしない私が初めて一人で作ったクッキーを手に、よしえちゃんの寝室へ足を運んだ。そこではベッドで寝ているよしえちゃんの姿があり、私はベッドの横に腰掛けてたくさん話をした。高校の話や部活の話、今度全国大会に出ることなど、今まで話せなかったことを、楽しそうに聞いてくれた。

「お箏を弾いている姿は見られない？」

部活の話をすると、私がお箏を弾いている姿を見てみたいと言ってくれた。よしえちゃんの家にはお箏がある訳ではなかったから、母のスマホに保存されている演奏会の動画を見てもらった。

「凄いねぇ。いつか生で聴きたいね。」

と、嬉しそうに褒めてくれた。

「これ、初めて一人で作ったクッキーなんだ。よしえちゃんに食べて欲しくて作ってきたんだよ。」

演奏会の動画を見てもらった後にクッキーを渡した。以前、よしえちゃんは昔から自分の口に合わないものは食べないと聞いていたため、食べてくれるかなとドキドキしながら渡した。すると、

「美味しそう、またあとでお茶と一緒にいただくよ。」

と言って受け取ってくれた。

しばらくリビングで過ごしていると、ベッドから起きてきたよしえちゃんが私のクッキーを片手にやってきた。何も言わずに袋を開け、お茶と一緒に黙々と食べてくれる。ゆっくりとした動作で一枚のクッキーを食べ終わると、

「美味しかったよ、ありがとう。」

と、喜んでくれた。後から聞いた話だが、私たちが家に帰った後に一枚も残さず食べてくれたらしい。その話を聞いて、私はとても嬉しくなった。

葬式の日、たくさんの人に見送られながらよしえちゃんは天国へと旅立って行った。とても悲しかったけれど「私の葬式では泣いてほしくない」と言っていたから、泣くのを堪えて見送った。他の人たちも、みんな笑顔でよしえちゃんを見送った。

身近な人が亡くなるのは突然だ。よしえちゃんにクッキーを渡せなかったら、きっととても後悔していただろう。だからこそ、大切な人たちには日頃から感謝の気持ちを伝えることを忘れずに生きていきたい。